

Title	向坂逸郎著 マルクス伝 (マルクス・ エンゲルス選集 13)
Sub Title	
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.10 (1962. 10) ,p.959(101)- 960(102)
JaLC DOI	10.14991/001.19621001-0102
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621001-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

的な意図のもとにかけられている。だからこの本は、権威をうちたてるためではなく、「社会における人間のあり方」について読者をいや応なく、自分自身で考えさせるべくかかれた、といつてもいいだろう。

その特徴的なあらわれの一つは著者たちが近代社会の基本構造を把握するために、体制、民族、階級の三つのカテゴリーをとり上げ(二〇頁)、それぞれに対応して社会思想史を三つの解放に区分して考察していることである。第一部は人間の解放、第二部は民族の解放、第三部は階級の解放である。(体制と人間がどう関連するのかが明らかでない。なお、その他に、体制、段階、状況の三つのカテゴリーがあげられ(三五八頁)ている。)もちろんこれらは無関係のものではなく、歴史的段階、国によってそれぞれからみあったものである。そして現代に生きるものは、これら三つのカテゴリーのもつ歴史的意味を、主体的に体得しなければならぬことを説かれるだろう。人間、民族、階級、たしかにこれら三つのカテゴリーは、歴史がわれわれにのこし、また、現実が日々われわれの眼前にその解決を迫っている問題であることは疑いえない。読者はそれについて考えざるをえないだろう。だが、これら三つのカテゴリーを社会思想史の基本的なカテゴリーとしてえらび出す

こと自体には問題があると思われる。それについて論ずるのは紹介の域をこえるが、むしろ、それに関する成果ある論争こそ、この共同著作の期待するところであろうことをつけ加えたい。また本書は、時に応じて利用すべき本としても、巻末の参考文献とともに、社会思想史を学ぶ意志のあるものにすめたい。(岩波書店・A5・三八七頁・六五〇円)

野地 洋行

田口憲一著

『大企業は暗躍する』

大企業は「現代のリヴィアサン」である。われわれの生活は、直接間接に、大企業の網のなかに組みこまれており、その支配のもとにおかれている。生産力の強力な担い手として、大企業は、「正直爺さん」をよそおい、われわれのまえにその素顔を現わさない。

本書では現代の企業もつ「五つの顔」が扱われている。プロローグ(五つの事件の企業史的背景)、エピローグ(五つの事件の意味と性格)を前後にして、独占(史上最大の反トラスト裁判)、乗取り(買占めをめぐる米英二社の死闘)、談合入札(大電機メーカーのなれあい)、特別背任(会社首脳部の計画的汚

職)、詐欺(今世紀最大の株式詐欺事件)、の五ヶースが、オムニバス形式のノン・フィクション経済読物として書かれている。

アメリカの石油・アルミ・電機・自動車・証券における各事件史が「大企業の暗躍」としてとらえられ、扱われる問題領域は広い裾野をもっている。独占と競争、独占価格設定、ブライス・リーダーシップ、コリュージョン、資本集中戦術、秘密カルテル、企業組織と個人、「ホワイト・カラーの犯罪」、大企業の官僚制と非情、擬制資本と射撃心、詐欺、等々、総じて、アメリカの誇る自由企業体制の日蔭にあるいは日向に生まれた諸現象が、「暗躍」のなかに含まれている。それらを通じて、われわれは、非情な資本が人間に強い異常な行為をなまなましく知らされる。そして、公的・私的「犯罪」と背なかあわせの現代人、つまり、われわれ自身をそこに見出すのである。

現代資本主義の「繁栄」の反面に資本主義の腐朽化の深化がある。ここに描かれた大企業の素顔は、いわゆる産業もの、経済ものとして、興味本位の読物に終ってはならない。また、アメリカという彼岸の出来事として片づけられてはならない。現代独占資本主義の経済法則を究明する過程で、そこに必然的に生成する、資本家、経営者、ホワイト・カラ

1. 寄生インテリ等のいわば「限界状態」における思想と行動の非人間性を、われわれは仮借なく告発しなければならぬ。その意味で本書はポピュラーな形での重大な問題提起の書である。ただ「理論的総括」をめざした前・後の解説は、それなりに示唆にとむものではあるが、いわば作家と評論家の混在となり、かえって論告の鋭さを減じているうらみがある。(新潮社、ポケット・ライブラリ、一九六二年六月刊、二九〇頁、二二〇円)

佐藤 芳雄

向坂逸郎著 『マルクス伝』

(『マルクス・エンゲルス選集』13)

わが国にマルクス主義が導入されて以来、マルクス自身による『共産党宣言』、『資本論』をはじめとして、はたまた最近の『経済学・哲学手稿』等、幾多の著作が紹介されてきた。それと同時にマルクスの六〇余年にわたる生涯や、その間における彼の思想的発展などが明らかにされてきた。しかしながら、これらの企図は、マルクスの著作の未開発や、日本のマルクス主義がその半世紀以上の歴史のなかで直面した弾圧政策のために、十二分の成

果をあげたとはいえなかった。その間、諸外国では、とくにモスクワのマルクス・レーニン研究所などを中心に、マルクスのうずもれた諸資料の発掘がさかに行われ、マルクスの生涯・思想学説発展研究の分野では急速な進歩がみられるに至った。とくに今世紀に入ってから明らかになった「ドイツ・イデオロギ」、さきに掲げた『経済学・哲学手稿』を中心としたマルクスの初期(一八四〇年代)の抜萃帳などの発見は、マルクス主義に一層の確固たる基礎を提供することになった。また同時に、マルクス主義の生成史に論究欠くべからざる研究分野をつくりあげてきた。今日われわれが「初期マルクス研究」と呼んでいるものは、このようなマルクス主義の生成過程に現われてくる思想的諸問題を取りあげ後期「資本論」を中心とした時代との体系的発展過程を問題としていたのである。従って、マルクスの生涯を描こうとするならば、そのこととはたんに通俗的方法による「伝記」の域を一步出た、思想的な発展と密着したところで「伝記」を書くということになる。あるいは、「伝記」を「伝記」そのものとして読者に提示するのではなく、マルクス主義の体系的理解を可能にするような基盤を与えるものとして提示しなければならぬ。従来おこなわれてきたメーリンゲン『カール・マルクス』(そ

の生涯と歴史——、リヤザノフ『マルクス・エンゲルス伝』がマルクスの思想発展研究のうえでつねに問題にされてきたのは以上のような意図で「伝記」が書かれているためであらう。現在、徐々に刊行されている、A. Cornu, Karl Marx und Friedrich Engels, もまたその意図において同様であらう。他国に類をみない永い歴史と高い研究水準を有するわが国のマルクス主義も、いつかは独自の「マルクス伝」「エンゲルス伝」をもたなくてはならなかった。

本書はまさにかかる状況のうちに投げられた、わが国の本格的「マルクス伝」の最初の一石としての役割をになつたといつて過言ではなからう。向坂氏の今日までのマルクス経済学者としての多方面の活動をもってすれば、「マルクス伝」はなすべくしてなつたといえるかもしれない。とくに、近年の労働運動の中でかなり重要な位置にあって活動されていた氏が、マルクス伝を通して主張したいと考えていることが、明白に感じとれる。とくに第一章から第四章にかけてのマルクスの青年時代の描写のなかに読みとることができであろう。そこでは、マルクスが革命家としての基礎を築き、思想的出発をした青年時代における彼の人間像を通して、理論と実践の統一を心がけ、たえず現実的なもののみに関

新刊 経済学年報5 慶應義塾 経済学会 編

[¥ 500 円 80]

- 一九三〇年代の農業恐慌の性格について……………常盤政治
 市場構造と価格支配……………北原勇
 —独占価格論序説—
 比較生産費原理の現代化に関する一考察……………深海博明
 —ヘクシャー・オリオン定理の検討を通じて—

既刊

4 (1960年度) ¥ 720 円 120

- 歴史科学方法論……………寺尾誠
 ウィリアム・ゴドウィンの生涯と思想……………白井厚
 —特に The Enquirer を中心に—
 応募方程式による労働市場の分析……………小尾恵一郎
 —戦前紡績業における地域間労働移動—
 第二次大戦前における規模別賃金格差資料……………佐野陽子

3 (1959年度) ¥ 430 円 70

- 経営の専門職業化……………青沼吉松
 —大企業の内部組織とその外部諸関係—
 集团的所有と「差額地代」……………平野絢子
 帝国主義確立期における
 ドイツ財政の構造と機能の発展……………大島通義
 —ひとつの試論—
 低開発国の経済成長理論……………大宮僕一

発売元 東京都港区芝三田綱町1 慶應通信
 振替東京 155497

心を払ってゆかなくてはならないという著者の主張を汲みとれるであろう。このことはまた著者が周知の三池闘争の過程で学んだことでもあり、著者は真にマルクスを生きた人間として、今後も生きつづける人間として、えがこうとつとめている。全体として、著者はマルクスの人間としての思想発展を明らかにすべくマルクスをめぐる多くのエピソードを入れて豊富な内容を心掛けておられるのであるが、その根底にあるマルクスの思想そのもののとり扱いには、現在まで向坂氏のマルクス研究に向けられた問題点への解明とともに不明瞭に残されているところが多いのではなからうか。しかし、マルクスの如き偉大な人間の生涯や思想に向坂氏の労作を以ても解明しえないところは多いのであり、このような研究を土台として、「永遠に生きる」人間像としてのカール・マルクスをわれわれ自身のものにしてゆかなくてはならないであろう。(新潮社・B6・三八〇頁・三八〇円)

下村 治著
『日本経済成長論』

本書は、池田内閣のブレインといわれる下

飯田 裕康

村治氏の論文集である。下村氏は、今日の日本経済が歴史的勃興期にあり、大きな潜在成長能力を持っていると考える。そしてこの成長能力を十分に伸ばすような高成長政策を提唱してきた。現実の日本経済は、こうした主張の正しさを裏書きした感があるが、氏の論はいくつかの批判をあびてきた。第一は、高度成長は、供給能力の限界を越え、インフレを生ずるといふ批判であり、第二は、国際収支の悪化を招くといふ論であり、第三は、二重構造を深化させるとの批判である。本書はこれらの問題点に意欲的な解答を与えようとする論から成る。まず第一に、産出係数がほぼ一であるといふ論をめぐって激しい議論がなされてきたことは周知のとおりであるが、本書で用いられている限界需給比率(需給調整係数)と産出係数(β)という考えにも、産出係数が一に近いことが前提とされている。氏はこの限界需給比率が、以下である限りインフレは生じないと断言される。おそらく氏は、有効需要総額が供給能力総額を上廻る場合にのみインフレになるという単純なケインズドローマの需給均衡式を信奉していられるのだから。だが、この種の論は、市場の完全競争の状態を想定する場合のみ成立する論である。不完全競争下では部分的な需要圧力、コスト圧迫、その

他の構造的要因のためインフレが生ずるといふことが想起されるべきである。氏の理論では独占的要素の存在は全く無視されている。第二の批判について、下村氏は日本の限界輸入依存度が低位にとどまるとして反論してきた。だが、限界輸入依存度が低くなるためには、限界輸入依存度の低い公的支出と個人消費支出比率の増大(所得平等化がそれを促す)が必要であることを氏は忘れてしまわれたようである。第三点にたいして、氏は高成長は二重構造を解消させると反論される。氏のこの基本的認識は正しい。だが、氏は成長のみを重視され、二重構造解消過程に生ずる犠牲を軽くみていられるようである。最後に、氏は、現在の日本が歴史的勃興期にあるといわれるが、その論拠はあまりに薄弱である。

日本経済の成長能力と基本的動向を早くから見抜かれた氏の業績は高く評価されるべきであるが、以上のような点について疑問が残る。われわれは著者が、歴史的勃興期の根拠づけ、独占要素、政府部門、所得分配平等化の効果の需給均衡モデルへの導入、産業構造の転換に伴う摩擦と犠牲の考慮等をされて、下村理論を発展させることを期待したい。(金融財政事情研究会・昭和三十七年刊・A5・三三九頁・六〇〇円) 一九尾 直美